グローイング・スキルオンライン
Growing Skill Online
tera
イラスト 山椒魚
試読版
ツギクルブックス

1章　魔法使いって殴っちゃいけないの？

「さて、これからどうするか……」

路地裏の細い一本道でひっそりと、民家の壁を背もたれにして俺は一人悩んでいた。

友人に誘われて最新のＶＲＭＭＯＲＰＧを始めてみたのはよいが、勝手が分からずに痛恨のミスをしてしまったのだ。

面倒くさがってチュートリアル画面を飛ばさなきゃよかった。もっとも、今さらそんなことを後悔しても、時すでに遅しなんだけどな。

実家の道場に着払いで送りつけられてきた〝グローイング（G）・スキル（S）・オンライン（O）〟とかいうこのゲームは、さまざまなスキルを取得し、上位スキル、派生スキルへと育成しながら、中世ヨーロッパ風の広大な世界を冒険する王道ファンタジーだ。

ファンタジーなら魔法使いでもやってみるかと思い、見習い魔法使いを選択したまではよかったが、まさか魔法職を選んでも近接戦闘向けのスキルが取得できるとは思わんかった。

最初から魔法スキルなるものを持っているものだと勘違いし、すぐにログインしてステータスを確認してみると、俺が取得していたのは【スラッシュ】と呼ばれる袈裟斬（けさぎ）りスキルだった

のだ。

プレイヤーネーム：ローレント
職業：魔法使い見習いＬｖ１
信用度：10
残存スキルポイント：０
◇スキルツリー
【スラッシュ】袈裟斬りの威力が倍増する攻撃スキル。
・威力Ｌｖ６／10
・消費Ｌｖ１／10
・熟練Ｌｖ１／10
・速度Ｌｖ１／10

一般的に魔法職の場合、【エナジーボール】という魔法スキルを選択する必要があるらしい。魔法使いは物理攻撃力が低く、魔法攻撃力が高いからだな。

最初のうちは【スラッシュ】でも問題ないかと思い、最初に持っていた杖を売り払って、そ

の資金で長剣を購入した。それを持ってフィールドへ行き、最弱のモンスターであるグリーンラビットと戦ってみたのだが……見事に瞬殺された。

たかが兎のモンスターに負けるとは思わんかった。物理攻撃力だけでなく、素早さも防御力もＨＰも低いとはな……。魔法職め。

魔法を使うだけあって、魔法防御や魔法耐性、ＭＰは近接職よりも多めで成長率も高いらしいのだが、その本領は魔法スキルを取得して初めて発揮されると。ならば、魔法スキルを取得しに魔法使いギルドへ赴けばいい話なのだが、問題はそれほど単純ではない。

「まさか、魔法使いギルドと剣士の館が犬猿の仲なんてな」

驚きの連続だ。知る由もなかったよ。

スキルを取得するために魔法使いギルドへと向かったわけだが、見習い魔法使いのローブを身につけて長剣を腰に差した俺は、門前払いを食らってしまった。

剣を捨てて、杖を持ってくれれば魔法スキルを教えてもらえるらしいのだが、最初に持っていた杖を取り戻しに行くと、既に買い手がついていて買い戻し不可。新しい杖を買おうにもグリーンラビットに一度殺されて、その時のデスペナルティで少ない所持金がさらに目減りしていた。

「いやはや、ゲームって難しいな……」

裏路地でそう独り言ちる。
ちなみに今の服装は、服もローブも全て売り払ったので、インナーシャツとインナーパンツのみといった姿である。
とにかく杖が購入できれば、例えこんな肌着姿でもグリーンラビットと渡り合えるはずだと思った。結局、初心者用の装備は二束三文にしかならず、杖を購入するには至らなかったのだが……。
肌着姿は周りの視線が痛すぎるので、解決策を思いつくまで、とりあえずこの裏路地に身を隠すことにした。
俺をゲームに誘った張本人とも連絡を取ってみたのだが、別のフィールドで狩りをしているらしく、助けにくるまでしばらく時間がかかるとのこと。
「とりあえず暇でも潰すか」
下手にログアウトしてすれ違いになっても困るし、適当に空き地を探してそこで軽く身体を動かしてみることにした。
魔法使いの鈍ったらしい身体の動きには、いまだに慣れない。現実とのギャップが酷すぎる。足や腕についても、その辺の近接職プレイヤーと比べてかなりほっそりした、いかにもガリ勉ですって感じの身体つきだった。

これは地味に慣れていくしかないな。再び身体を鍛え直すことも、一つの楽しみとして捉えておく。現実で暇を持て余していた俺を見かねて、友人が誘ってくれたゲームなのだし、こういう時こそ前向きに思考を切り替えるべきだな。

「これ、そこで何をしておる」

空き地を探して路地裏を歩いていると、不意に後ろから声がかかる。声の方向へ振り返ると、杖をついた白髪白髭の爺さんが、パイプをふかしながら俺をジッと睨んでいた。

「まったく、怪しい者が徘徊しておると聞いて来てみれば……ただの変質者じゃったか」

言葉が深く突き刺さる。いったい誰が通報したんだろうか。確かに、俺の格好は明らかに変質者だが、捕まるようなことをしたわけではない。インナーシャツとインナーパンツで、隠すところはしっかり隠している。

「答えぬか。答えなければ、無理やりにでも事情を聞かねばならぬ」

無理やりにでも事情を聞くとは、どういうことだ？

「魔法スキルを教えてもらいに剣を持ったまま魔法使いギルドに向かったら、杖を持ってこいと門前払いされて、とりあえず持ち物全部売り払って杖を買おうとしたけど、お金が足りなかっただけです」

「馬鹿か？　さすがに信用ならんわい」
まあ、確かに。俺でも信用できないわ。
……これはもう逃げるしかないな。
俺は一応ありのまま全てを話した。だがそれを信用してもらえないとなると、三十六計逃げるに如かず。痴漢の冤罪でもそうだ。俺は踵を返して走り出した。
「……それがお主の答えか？」
動きがトロくさい魔法職でも、老人相手ならばなんとか逃げ切れるだろう。それに、入り組んだ裏路地ならば、いくらでも撒く方法はある。
裏路地を駆け出し、次の角を曲がる。だが目の前の光景に目を疑った。後ろにいたはずの爺さんが、正面に立ち塞がっていたからだ。
「なっ!?」
「この儂を前にして、逃げの一手を選ぶとはのう……」
パイプを燻らせたまま爺さんは右手を伸ばし、思わず立ち止まった俺の首を鷲掴みにして、そのまま壁に激しく叩きつけた。
「ぐっ！」
ゲームだからか痛みは感じないが、相応の衝撃は伝わってきた。それにしてもこの爺さん、

見かけによらず力がとんでもなく強い。いや、俺の力が弱すぎるだけか。
だが、俺もただではやられない。掴まれて叩きつけられたのを逆手にとって、手と足を真っ直ぐ爺さんの顔と腹に打ち込んだ。
太極拳でいう退歩の応用。攻撃を受けた際、無理して反発せず、一歩後ろに下がって力を受け流し、そして反撃に繋げる。後ろの壁に対して垂直に手足を伸ばしている分、まともに受けた爺さんは壁にぶつかったようなものだろう。
「ほう、やりおる」
爺さんのそんな声とともに、パイプが地面に落ちる音が響いた。
「くっ」
いまだ首元を掴まれたままなので、掴んだ右腕をそのままへし折りにかかる。
「無駄じゃ。町中で許可なく戦いはできん。大人しく拘束されろ」
くそ、どうすればいい。掴まれた腕を蹴ろうが殴ろうが、何かに阻まれるようにビクともしなかった。もがく俺に対して、爺さんは言った。
「その前に、儂のお気に入りのパイプに土をつけた報いは受けてもらおう」
爺さんが、杖を持っていた左腕を振りかざした。すると、円形に光る魔法陣が出現し、俺を包み込む。気が付いたら、――遥か上空にいた。

そのまま重力に従って真っ逆さまに落ちていく。
「うおおおおおおおおおおおっ！」
紐なしバンジー？　いやパラシュートなしのスカイダイビングだ！
これが魔法スキルってやつか？　ありえないだろ、マジで！
掴める物は何もない。どれだけ受け身を極めたとしても、さすがにこの高さから地面に叩きつけられれば、即死は免れないぞ。
「ほっほ、快適な空の旅を楽しんどるようでなによりじゃ」
「なっ⁉」
声が聞こえた方向を見れば、俺と同じように爺さんも地上へ急降下していた。
「ここは町ではなく、あくまでフィールドの上空。落ちれば間違いなく激しい痛みを伴って即死するじゃろうな。まあ、儂は大丈夫じゃが」
「何を悠長に！」
「……本当のことを話せ。武器なしにそこまで戦えるお主が、何故初心者の振りをして裏路地におった。初心者狩りのプレイヤーか？」
急降下する俺を笑って見ていた爺さんは、急に真剣な表情になってそう尋ねた。
「初心者狩り⁉　濡れ衣なんだが‼」

「まだ謀(たばか)るか……ほれ、もうあと数十秒で地面に激突じゃぞ？」
地面がどんどん近くなっていく。
「……本当に何もしてない！　半裸で町をうろついていた事実は認めるが、町の人に危害を加えるつもりはない！　ただどうしようもなかっただけだ！」
「ふむ」
爺さんは俺の真意を見定めるように、じっと目を見つめ続けている。
信じてもらえないなら、もう覚悟を決めるしかない。事情は全て話したし、それが信用できないなら、デスペナルティで身の潔白を証明するしかないな。俺は歯を食いしばり、目をつぶった。

……ん？　生きてる？
「そんなに固くならんでも、もう地上じゃ。まったく強情な奴じゃな、お主」
ため息交じりの爺さんの声に目を開くと、いつの間にか裏路地に戻ってきていた。惚けた顔をして地面に座り込む俺に、爺さんはパイプを燻らせながら語りかける。
「お主の話を信じるならば……どうしようもない初心者プレイヤーか、はたまたただの馬鹿にしか思えんのじゃがな？」

馬鹿ではないが、概ねその認識で合っているのが悲しいところだった。今一度それを告げると、爺さんはため息とともに、口に含んだ煙を大きく吐き出して杖を繰る。

再び出現した魔法陣。思わず立ち上がって構えた。

「そう身構えんでもよい。こいつをくれてやる」

魔法陣から出現したのは、適当な服の上下と、少し古びた魔法使い用のローブ。

「これは？」

いまいち状況が飲み込めてない俺に、爺さんは長く伸ばした髭を撫でながら告げる。

「信用すると言ったじゃろう？　魔法スキルを取りにいくために服を売り払い、この状況に陥ったのなら、儂がお古をくれてやるから身につけて、さっさと魔法使いギルドへ行くがよい。さすがに杖まで面倒見きれんが、杖がなくとも魔法スキルを取得できるように言っておく」

魔法陣から出された服を手渡し、杖をカツカツとつきながら踵を返して路地裏を去っていった。

ゲームとはいえ、正直ここまで翻弄されるなんて初めての経験だ。だから気になった。

「あなたはいったい何者ですか……？」

俺の問いかけに、爺さんは振り返りもせず答える。

「儂か？　隠居したただのしがない魔法使いじゃ」

――これが魔法使い。その言葉に思わず喉が鳴った。
完全なる未知の領域。初見の相手だったとはいえ、まさか為す術なく空中に投げ出されるとは。そして、助けられて服まで恵んでもらったとなれば、完敗だな。
「待ってください」
故に思わず呼び止めてしまった。
「何じゃ、しつこいぞ？　さっきと同じことを繰り返したくなければ、さっさと服を身につけることじゃな」
訝しげに眉をひそめる爺さんの正面に立ち、俺はその場で膝をついて頭を下げた。
「弟子にしてください。お願いします」
「……は？」
いきなりの土下座に、やや上ずった爺さんの声が響いた。
「目を疑うほどの魔法を扱う貴方から魔法を教えてもらうには、このようにお願いするしかないと思いました」
あいにく今の俺は何も持ってないから、こうするしか他にない。
「いきなり何じゃ？　とりあえず落ち着くがよい。まずは立ち上がり、そして服を着よ。儂が案内してやるから、魔法使いギルドへ向かうがよい」

「正直、剣士の館とくだらない争いしている魔法使いギルドに、本物の魔法を教えられるはずがないと思っています」
「……うーむ、まだ小競り合いをしとったんか奴らめ。これからプレイヤーが流入して忙しくなるというのにのう。それに巻き込まれてしまったお主にも同情はするが、わしは弟子を取らん主義じゃから、いくら頼んでも無駄であろう」
そう言い含めようとする爺さん。奥義は基本秘匿とするのが常だから、そう簡単には教授してもらえないのは理解している。承知のうえで俺は再び頭を下げるのだ。
「俺を負かした貴方だからこそ、教わる価値があると思います。お願いします」
もしかして土下座じゃ足りないのか？　ふうむ、今の俺には出せるものが何もない。ならば五体投地、チベット仏教様式の礼拝を用いて……。
「こら、待たんか！　頭を上げて落ち着かんか！　めちゃくちゃ厄介な奴と関わってしもうたのう……む？」
気付けば、声を荒げる俺と爺さんのやり取りに「何事か？」と裏路地を覗き込む、近隣住民たちの姿があった。
「いかんな。一度場所を変える。話だけならいくらでも聞いてやるから、今は言うことを聞け」
裏路地に半裸状態でうつ伏せに横たわる俺と、それを見下ろす爺さんの姿は、ありもしない

誤解を生み兼ねない。状況的にまずいと思った爺さんは、小声でそう告げると、杖を振りかざして魔法陣を出現させた。

空中へ投げ出された時と同じように、得体の知れない浮遊感が俺を包み、そのまま薄暗い部屋の中へと視界が切り替わった。

「うわっ」

燻んだ色のフローリングの上に、真っ逆さまに投げ出される。

「まったく余計なことをしてくれたのう。半裸の男と同じ部屋にいるのは癪に触るから、お主に渡した服を早く身につけんか」

この爺さん、わざと床にぶつかるように飛ばしたな。爺さんは悪態をつきながら俺にそう指示すると、年代物の一人用ソファに腰掛け、手に持っていたパイプに火種を入れて煙をふかし始めた。

「ここは？」

「儂の家じゃ。あのままだと、あらぬ誤解を生みかねんのでな」

大きく吐いた煙が、部屋の中に充満していく。窓から多少の明かりは射し込んでいるが、石造りの壁がところどころ苔むしているところを見ると、日当たりは最悪だな。

「今一度言うが、儂は弟子を取る気はないぞ。それに初心者プレイヤーなら、大人しく魔法使いギルドでエナジーボールのスキルを取得しておいた方が身のためじゃ」
「だから、そのエナジーボールを取得しに魔法使いギルドへ赴いたら、門前払いを食らったと何度も言っているじゃないですか」
貰った服を身につけながら、彼の質問にそう返しておく。
「じゃがのう、魔法使いギルドは魔法スキルを成長させるほとんどの部分を一手に引き受けておる。無駄に反発したところで、良いことは一つもないぞ」
この爺さんの言い分はもっともだった。門前払いを受けたとしても、杖を持って出直してこいと言われただけなのだから、まだ道は残されているのだ。
だが、この爺さんの戦いぶりを一度体感すると、たまたまフィールドで目にした、パーティプレイで後ろから魔法をポコポコ放っている魔法職の姿に疑問を感じるのも確かだった。
「なにやら納得いかん表情じゃが、弟子はとらん」
「なら、納得のいく理由をください」
「……本当に強情じゃのう。レベル1でも接近戦であれだけ戦えるお主ならば、理解できるじゃろ。今の魔法使いは、中長距離からの威力に特化した魔法スキルばかりを扱っておる」
爺さんは「じゃが」と前置きをして立ち上がると、何もない空間に魔法陣を作り、そこから

長剣を出現させると抜き放った。
「儂の無属性魔法は、火力支援よりも一対一での接近戦を主としておるスキルが多い。故に一般的な魔法職と比べて、少々特殊な運用が必要となる」
抜き身の剣を構えた爺さんは、ソファの置いてある暖炉の前から忽然と姿を消すと、次の瞬間には剣を振り上げた状態で俺の目の前に出現した。――あまりの早技に一瞬息が詰まる。
顔面に向かって突き込まれた剣先は、俺の横髪を数ミリほど斬り裂いた。その剣筋はとても素人には不可能な代物で、暦年を積み重ねた武術家のものだ。
「ほう。いきなり斬りつけたというのに、まぶた一つ動かさんか」
爺さんはそう言いながら、値踏みするような視線を向ける。
「耳を切り落とされても、弟子にしてもらえるなら安いものです」
「ほっほ、うまい社交辞令じゃな。今まで弟子にしろと言ってきた者は山ほどおったが、こうして脅してやれば、腰を抜かして逃げる者ばかりじゃった」
そう言いながら鞘に収めた長剣を魔法陣の中にしまうと、爺さんは暖炉の前のソファに座り直し、お気に入りのパイプを燻らせた。そして、言葉を続ける。
「――気が変わった。お主が相応の覚悟を持つならば、儂の出す試練を越えてみよ」
俺の目の前に、インフォメーションメッセージとともに小さなウィンドウが表示された。

《師弟クエスト【とある魔法使いの弟子入り試練】が出現しました。詳細を確認のうえ承諾してください》《承諾しますか？　ＹＥＳ／ＮＯ》

何だこれは？　いきなり訳の分からん展開に少し戸惑ってしまう。その様子を見ていた爺さんは、くっくっとした笑い声を上げていた。

「ほっほ、詳細を聞くのが怖いか？　まあ怖気付くならそれも致し方なし」

どうやら、俺が試練の内容を聞くことに怖気付いたと思っているようだった。普通は詳細を聞いてから受けるもんなのだろうが、そんな生半可な覚悟では到底無理だと言いたいのだろう。

「いえ、望むところです」

俺はそう言い返して、空間に浮かび上がったウィンドウの〝ＹＥＳ〟を乱暴に殴りつけた。どんな試練が待ち受けていようが、必ずクリアしてやる。

2章　プレイヤーキラー

とある魔法使いこと、謎の爺さんは、スティーブンという名前だった。そのスティーブンから受けた弟子入り試練の内容は、「魔法スキルを一切取得せず、北の森のエリアボスであるスターブグリズリーを1人で討伐して、そのドロップアイテムを討伐証明として持ってこい」というものだった。

ヘルプウィンドウからマップを確認すると、この町の北門からフィールドに出て、道なりに真っ直ぐ行けば北の森に辿り着くらしい。

その森にスターブグリズリーと呼ばれるエリアボスが出没する。倒せば森の先にある次の町に行けるようで、いろんなプレイヤーがチャレンジしていて、情報を集めるのは楽だった。

情報なしにプレイして変質者呼ばわりされた一件で、例えゲームであろうとも、事前に下調べをしておくのが大事だと学んだのだよ。

下調べを進めていくうちに、スティーブンが提示したスターブグリズリー討伐の試練がどれだけ難しいものかってことも理解できた。

スターブグリズリーの推奨討伐レベルは10。それも6人フルパーティでの推奨レベルだった。

現時点で俺はいまだにレベル1。今すぐ挑みに行くのは、さすがに自殺行為だな。魔法スキルの取得を禁じられているし……。

代わりといってはなんだが、スティーブンは俺に1つの魔法スキルを授けてくれた。

【アポート】物体を手元に引き寄せる魔法スキル。
・精度Lv1／10
・距離Lv1／10
・重量Lv1／10
・詠唱Lv1／1

【アポート】は視認範囲の物体を手元に引き寄せる魔法スキルで、これを育てていけば、スティーブンに上空に飛ばされた【テレポート】というスキルに成長するらしい。

空き地に転がっていた煉瓦で試してみると、本当に手元に引き寄せることができた。自由度は割と高く、スキルパラメーターに従って引き寄せられる物体の距離、重さ、精度が変化するみたいだ。引き寄せる距離が遠くなればなるほど、引き寄せることのできる物体の重量制限はキツくなり、精度も悪くなる。

他の物でも試してみたいところではあるが、現時点での俺の所有物はスティーブンに貰った装備類と拾った煉瓦しかない。彼は、服とスキル以外、武器や軍資金になりそうな物は一切恵んでくれなかった。それも含めて自分でやれということなのだろう。

うーむ、このままではレベル上げすらままならない。さすがに武器くらい融通してくれてもいいと思うのだが……。このままだと、また服を売りかねないぞ。まさか煉瓦片手にグリーンラビット狩りに出ても、返り討ちに遭うのが関の山だ。

……いっそのこと、優しいプレイヤーに装備を恵んでもらおうかと思い、人通りの多い北門付近に座り込んでいると、後ろから声をかけられた。

「何やってんの、おまえ」

振り返ると、硬そうな毛皮で作られた装備に身を包み、大剣を2つ背負った男性プレイヤーが呆れた顔をして立っていた。

「トモガラ」

金髪ドレッドヘアにして、パッと見ヤンキーにしか思えない男。こいつが俺の家にVRゲームを着払いで送りつけてきた本人である。現実（リアル）での友人だから、リア友というやつだな。

「え、まだレベル1かよ？　終わってんな、おまえ」

「む、どうして分かった」

「はあ？　鑑定のスキルくらい取っとけよ……ってか、大変だっつうから急いで戻ってきてみたら、こんなところでいったい何やってんだ？」
トモガラは、俺からの連絡を受け、別の町から急いで戻ってきたらしい。
「プレイヤーから余った素材とか貰えたらいいなと思ってな」
「マジかよ……まあ、ゲーム初心者のおまえを放置したのは悪かったけどよ。こんなところでクレクレやってるなんて、おまえある意味ネトゲの才能あると思うわ、うん」
とりあえず差し当たっての問題は、武器とお金がないことである。トモガラにそれを告げると「フレンドにまで集るのか」と呆れ顔になりながらも、最前線組とやらで手に入れたモンスターの素材を適当に分けてくれた。
「いいのか、こんなに」
「まあ、余り物だしな」
「よし、さっそく小道具屋で売り払ってくる」
「ちょっと待てい」
肩を掴んで止められた。いったい何だ？
「不思議そうな顔してんじゃねぇよ。小道具屋で売るとかアホか。公園に露店がたくさん出てるだろうが。素材系はそこで売り捌けよ」

「何でだ？」
「このゲームはまだサービス開始したばかりだから、いろいろな素材の売り買いや情報交換がプレイヤー同士で盛んに行われてるんだよ。特に俺がやった素材はまだ持ってない奴も多いから、ＮＰＣに売るよりも高く売れるぞ」
ＮＰＣ？　ああ、ノン・プレイヤー・キャラクターのことか。プレイヤーを導く高度なＡＩで動いているらしいのだが、実際にゲームをプレイした感じだと、現実の人間とほぼほぼ変わりない。時代は進化したもんだ。

トモガラと公園へ向かうと、確かに風呂敷を広げて露店を構えるプレイヤーたちがたくさんいた。ゲームを始めてすぐに半裸で裏路地に潜んでいたから気付かなかった。
ちなみに露店を開くためのアイテムに露店風呂敷という物があり、チュートリアルをクリアしたプレイヤーに無料配布されているのだが、俺は言わずもがな持っていない。
「……俺はおめぇのお守りじゃねぇぞ、おいこらぁ」
素材の価値も分からず、買い叩かれそうになるのを何度か助けてもらっているうちに、トモガラは額に青筋を浮かべて、貧乏ゆすりをしながら俺を睨みつけるようになっていた。
ここで得たお金で購入しようと思っていた物はいろいろとあるが、まず武器屋へと向かい、

一番安い長剣を購入した。
「おいおい、魔法職じゃないのか？」
「そうだが？」
迷わず長剣を購入していると、後ろからトモガラが口を挟んできた。
「だったら杖じゃねぇの？」
うむ、その意見はごもっともだと思うが、こちらにも事情があるのだ。
「連絡を入れた時に書いていたと思うが、魔法使いギルドに門前払いを受けた後、ギルド以外で弟子入りできそうな人に出会った。その人に弟子入りするための試練が、魔法スキルを取得せずに北のエリアボスを討伐することだ」
非力な魔法職でも使えそうな殺傷能力の高い武器は、長剣くらいしかなかったのだ。というか、最初の町で購入できる武器が、長剣と大剣、短剣、弓、杖しかないのが悪い。
「……サービス開始したばっかりだから、おまえみたいにデタラメなプレイをする奴なんかいねぇんだよ。ってか、だいたいグリーンラビットにも負けたって言ってただろ。どう考えても同じ轍を踏んでるとしか思えねぇんだけど？」
「大丈夫だ。それに関しては考えがある」
そう告げて、次に目指したのは小道具屋。ここでも一番安いＨＰ回復ポーションとともに、

事前に下調べをしておいた補助系のスキルブックを物色していく。
１つにつき１０００グロウと値が張る買い物ではあったが、その価値はかなり高いといえる。
今回購入したのは、【鑑定】【採取】にプラスして【解体】【投擲（とうてき）】【掴み】の５つだ。
【鑑定】は言わずもがな、そのものに価値があるかどうかを調べるスキルなので、基本的に全てのプレイヤーが購入しているスキルらしい。
【採取】は、冒険者ギルドでの小遣い稼ぎとして薬草採取依頼を受ける際に必要となるスキル。
そして【解体】は、モンスターを倒した際にドロップするアイテムの拾得確率を上げるので、財布に優しいスキルだ。どれだけお金を心配してるんだろうな、俺。
【投擲】はスティーブンから貰ったスキルを運用するために購入し、【掴み】はトモガラからすすめられて購入した。
「掴みは知られざるいいスキルだぞ。武器を掴み損ねるとか、このゲームでは普通にあるしな」
俺は、杖ではなく長剣を扱う予定なので、握力に乏しい魔法職にはありがたいスキルだった。
ちなみに、これらの補助系スキルは、普通の攻撃スキルと違ってサブスキルツリーという項目にまとめられる。補助スキルにも、当たり前のようにスキルパラメーターが付いている。１レベル上昇するごとに２ポイント貰えるスキルポイントでは到底賄えないが、レベルアップで貰えるポイント以外にもパラメーターを上昇させるアイテムがあるらしいので一安心だ。

「よっしゃ、とりあえず危なくなったら助けてやるから狩ってみろよ」
狩りの準備が整うと、さっそくトモガラに案内されて、穴場の南フィールドへとやって来た。
「北や西に比べて人が少ないな」
点在するモンスターとプレイヤーの姿を見て、そんな疑問が浮かんだ。
「北の森から第二の町に行けば、第一の町に売っていない武器や装備を購入できたりするしな。まあ、サービス開始したばっかのゲームはだいたい何の考えもなしに先に進む奴が多いから、こういう穴場ができる。……ほら、目の前にグリーンラビットが来たぞ」
トモガラの言葉に何となく納得して、さっそく正面に出現したグリーンラビットとのリベンジマッチに集中する。
このモンスターに一度死に戻りさせられた原因は、接近戦で相手のＨＰを削りきる前に攻撃を受けて、逆に俺が瀕死になってしまうからだった。
相手は一撃で俺のＨＰを半分も削ってくる。ダメージの等価交換にすらなってない。ならば、スティーブンが授けてくれた【アポート】というスキルを利用し、遠くから物を投げつけて先手を取り、必殺の一撃を受ける前に相手のＨＰをある程度削いでおくのだ。
「ああ、そのための投擲スキルかよ」

手に持っていた煉瓦を兎に向かって投げつける俺を見て、トモガラがそう呟いていた。
弓を持つという選択肢はないぞ。せっかく少しだけ上げておいた【スラッシュ】のスキルがもったいないし、コスパが悪い。
「ギィッ！」
煉瓦を顔面に受けたグリーンラビットは俺を敵と認識して、猛然と体当たりを仕掛けてくる。そんなグリーンラビットに対して、俺は抜きはなった長剣を投げつけた。
「アポート！　スラッシュ！」
顔面に長剣の刃がヒット。怯んだところで接近し、脇腹に前蹴りを当てて転がすと、そのままガラ空きの首元に【スラッシュ】を叩き込んで倒した。
「……なんつーか、よくやるぜ」
俺の戦い方を目の当たりにしたトモガラは、何ともいえない表情になっていた。
「なんだよ、せっかくアポートのスキルを見せてやったのに」
「それ、ただの便利スキルだろ？」
「うぐ、ごもっとも」
成長すればとんでもないスキルに化けるらしいのだが、攻撃力はないし、【テレポート】のように生きているものを転移できない。トモガラの評価は的を射ている。

「俺がこのゲームの本当の戦い方ってやつを見せてやろう。ブースト、マッシブ」
再び出現したグリーンラビットを前にして、トモガラはそう言いながら俺の前に出ると、自分の持つスキルを使用しつつ、背中の大剣の1つを片腕で抜きはなった。
「俺から1つアドバイスだが、例え魔法職でもブーストのスキルは取得しておいた方がいい。戦士ならば大剣を片手で持てるようにもなるし、がんばればおまえのそのトロくさい動きも改善できるかもな。おらぁ！」
飛びかかってくるグリーンラビットに、真っ向から大剣を振り下ろした。すごい音が響いて、当然の如くグリーンラビットのHPは一撃で消滅する。
まるで手数を増やすことを選択した俺を、正面から蹴散らし、否定するような一撃だな。
なんだかしてやられた気分になったが、大いに参考になった。
大剣の重量は、そのまま攻撃力に繋がる。振り上げのみ【アポート】を利用し、あとはその重さに身を任せて振り下ろせば、一種の質量兵器として運用できるんじゃないだろうか。
「大剣を持つのはありだな。うむ」
そう呟く俺に、トモガラは持っていた大剣を投げ渡した。
「そもそも魔法職に振り回せるのか？」
当然、重くて持ち上がらない。というか、抜き身の大剣を人に向かって投げるとは……何事

だ、こいつ。
「レベルが上がれば大丈夫だろう。それに長剣なら鞘から抜いたり、振り上げる予備動作が必要なくなったりと、意外と便利なんだ」
振り上げた手の中に長剣を【アポート】し、そして振り降ろす。そんな動作をトモガラに見せてやると、感嘆の声を上げながら彼は言った。
「どうせなら刺突剣(しとつけん)とかにして、寄らば刺し、通じない相手は大剣で叩き潰すとかどうだ？」
「トモガラ、珍しく冴えてるな。天才かよ」
ある程度お金に余裕ができれば、鍛冶屋を訪ねて投擲しやすい片手剣でも作ってもらおうと思っていたのだが……刺突剣という選択肢は盲点だった。
「まあ、それはおいおいだな。今はとにかくレベル上げが優先だろ？」
「うむ」
情報交換もそこそこに、俺のレベルが5になるまで南のフィールドでグリーンラビット狩りを2人で行って、今日はログアウトの時間になった。

◆◇◆◇◆

新たに知った事実なのだが、空腹システムというものが採用されていて、例えゲームの世界でも腹が減るらしい。腹を満たしていなければ動きも鈍るし、ＨＰやＭＰに影響する。腹いっぱいすぎてもダメらしいので、ベストコンディションを心がけなければいけないのだ。

素晴らしいくらいどうでもいいリアル感を追求したシステムだな。されども郷に入っては郷に従えということで、大人しく俺御用達の小道具屋で堅パンと干し肉のセットを購入し、町を歩きながら水で流し込んだ。

味は普通。固く塩気が強いので、口の中で水と一緒にふやかして食べる必要がある。慣れてない人は食べにくいし、むしろ食べ方を知らない人が多そうだよな。

さて、町中を歩いてどこへ向かっているかというと、先日トモガラが使用していた【ブースト】という身体強化スキルを取得するために、武道場を探しているところだった。

「この辺りのはずだが……まさかここか？」

マップに従って辿り着いた場所は、広くとられた庭に巻き藁が並べられて、その奥には平屋の奥ゆかしい建築物がそびえ建っていた。

うむ、どこからどう見ても、日本によくある昔ながらの道場だ。瓦屋根じゃないことが非常に惜しいが、そうなればいよいよ世界観がめちゃくちゃになってしまうな。

とりあえず門の中へ入り、道場の入り口から中を覗き込んでみると、道着を身につけたＮＰ

Cたちが激しく声を上げて打ち合いをしていた。
入口付近に〝師範代〟と書かれた道着を身につけたＮＰＣがいたので、声をかける。
「すみません」
「戦いの根本とは！　身体の運びにある！　君も入門するかね！」
圧がすごいな、こいつ。暑苦しい雰囲気で、いきなり入門しないかと問われてしまった。
「いや、ここで身体強化のスキルを……」
「わが道場では！　健康の一環として！　初心者にも優しく教えているぞ！」
黙って人の話を聞けないのだろうか？
師範代は、高らかに叫びながら道場の一角を指し示す。そこでは子供のＮＰＣたちがわらわらと先生らしき人物に群がって、ちびっ子道場みたいになっていた。
「いえ、ブーストのスキルを教えてもらいたくて来たんですが」
「え？　……ああ、そういう人ね、ハイハイ」
何だ？　一気にテンションが下がってしまったぞ。
「スキル自体は１０００グロウで取得できる。……まったく、最近の奴らはスキルを取るだけ取って、ろくに鍛錬もせずにフィールドに駆け出してばかりだ」
ため息をつく師範代。その原因は、おそらくプレイヤーたちだろう。俺もトモガラに取るだ

け取っとけと言われてやってきた口なので、実に耳が痛い話だった。
「ブーストの……スキルの鍛錬なんてできるんですか？」
自力を底上げするスキルだから、レベルさえ上げてしまえばよいと思うのだがね。
「当たり前だ！　確かに何もしなくても身体能力をグッと底上げする便利なスキルだが、その前に基礎的な鍛錬で動かす身体を作らなければ、スキルなんかろくに使えないぞ！　まあほとんどが話を聞かずにスキルを得たら去っていくけどな！」
説明役ＮＰＣなのに、説明を聞いてくれる人が居なくて拗ねているようにも思えるが、準備運動をせずに運動をしたら身体を壊してしまうと言っているのだろう。
「ちなみに、魔法職なんですけど。鍛錬の意味ってありますか？」
師範代の言うことはよく理解できるし、基礎訓練を行うことに対しても特に問題はない。だが、もともと貧弱である魔法職が鍛錬したとして、意味はあるのかが気になるところだ。
「いい質問だ。誰も聞いてこんので話しとらんが、実は裏ステータスという目に見えない隠しステータスが存在するんだ」
「隠しステータス？　何ですか、それは」
「どんな奴でも戦って鍛えて経験を積んできた分だけ、レベルアップとともにステータスも強化されていくシステムだ！」

要するに、ＧＳＯはスキルを取得し育てるゲーム。故に自分の能力値が表示される画面を開いても、職業やレベル、持っているスキルくらいしか表示されないのだが……。
実際は持っているスキルや武器での戦い方など、プレイヤーの行動に応じて隠しステータスの経験値が貯まっていき、レベルアップとともにそれが密かに上昇するとのこと。
「つまり、魔法職でも日々鍛錬してレベルを上げれば、俺のように強い武術家へと至ることができるということだ！」
「……すごく重要な気がしますが」
「そうだ！　だが誰も聞いてこないから言っていない。プレイヤーのみんな、道場のチュートリアルを受けろよ！」
師範代は嘆く姿も暑苦しかった。そういう話ならば入門しない手はないだろう。
「とりあえず入門します」
「では、入門料５００グロウをいただこう！」
金取るのかよ。だから道場のチュートリアルを誰も受けないんじゃないのか。
「冗談だ。とりあえず一度実力を見ておこう。奥に道着が置いてあるから、好きに使うといい。プレイヤーたちのために道着を多めに注文したから、俺は小遣い減らしたんだぞ！」
嘆く師範代を無視して奥の部屋へ向かい、綺麗に畳んである道着を身につけた。

「着替えてきました」
「うむ、少し細いがなかなか似合っているぞ！」
そんな軽口を混ぜながら、師範代は道着姿の俺をそう評価する。
「では、開始線に立ってくれ。これから腕試しとして1つ試合をしてもらう。……マルス、こっちに来い」
「はい、師範代」
道場の開始線に立つと、師範代は隅でストレッチを行う茶髪の青年を呼び出した。
「ルールはどうするんですか？」
一概に試合をするといっても、パンクラチオンのように致死性格闘技でもなければ、バーリトゥードのように何でもありというわけでもないだろう。
「僕は何でも構いませんけどね？」
そんな俺の思いに反して、目の前の開始線に正対するマルスと呼ばれた青年は、師範代の代わりにそう答えるのであった。
口ぶりから、ものすごく舐められているような感覚が伝わってくる。まあ、身長は俺の方が高いとはいえ、マルスの身体はなかなかに鍛えられているのが見受けられた。
「では、俺も何でもありで」

「本当に大丈夫か？」
困ったような顔をして、師範代が視線を投げかけてくるが、にこやかに返しておこう。一度味見をしておく感覚だ。ゲームの世界の武術とは、いったいどんなもんなのだろうか。
「では……始め！」
師範代の合図が響く。俺とマルスは同時に動き出した。
「シッ！」
見極めるために後退する俺に対して、マルスは短く呼吸を整えると、身を屈めて一気に前に踏み込み、低い位置から抉り込むようなフックを繰り出した。
思ったより動きは早い。避ける余裕がなかったのでとっさに左腕で受けると、腕がもげるんじゃないかってくらいの勢いで弾き飛ばされた。何だ、功夫か？　違った。魔法職が軽かっただけだった。
「師範代、ダメです。この人は武術に向いてない」
派手に転んだ俺に向かって、マルスは呆れたように首を振りながらそう言った。
「それも一つの試練だ。お前も手加減を覚えろ」
「ガリ勉の魔法職が、いったい何を求めてここに入門したというのでしょうか？　健康のために通うつもりなら、そこらの子供たちと一緒に遊んでいればいいんですよ」

マルスの言葉に静かにムカつく自分がいた。増長にも程がある。しかも、さっきの一撃で決めようと思えば決められたのに、少し手加減されていたのがさらにムカつきを加速させた。
「しかも師範代、こいつ痛覚設定を弄ってるじゃないですか。鍛錬に来てるのに、痛覚を鈍らせて、正直僕は舐めているとしか思えませんね！」
……ん？　何だそれ。痛覚設定？　痛み？
疑問の表情を浮かべる俺に、師範代が頬を掻きながら聞く。
「まさかとは思うが……その辺も知らない初心者なのか？」
「ええ、まあ、はい」
衝撃で息がつまる感覚は何度かあった。だが、ゲーム中に痛みを感じるなんて普通思わない。
「その辺の設定については、最初のチュートリアルで説明されるはずなんだけどなあ」
そんな反応を見せる師範代に、正直に告げておく。
「チュートリアル、すっ飛ばしたんで」
「なるほど。ならば俺から説明してやろう。グローイング・スキル・オンラインはリアルな世界観でゲームを体感できるように、感覚設定という項目が用意されている！　ほら、ヘルプウィンドウを開いてみろ！」
暑苦しい説明モードを聞きながら、ヘルプウィンドウを表示させる。〝オプション〟メニュー

から〝感覚設定〟という項目を探してみると、師範代の言った通り、確かに存在していた。
「初期設定はＶＲゲームの世界に慣れていない人でも安心してプレイできるように、推奨設定が自動で行われる！　だが、チュートリアルをすっ飛ばすような奴は、全ての設定がオフになっているぞ！　危険だからな！」
項目の説明をさらっと読んでいく。安全面を考慮した関係上、同意の項目にチェックを付けないと、そもそもの設定すら表示されないらしい。どうりで気付かないはずだ。
師範代の言う通り、〝感覚設定〟とその中にある〝痛覚設定〟は全てオフ。なんやかんや攻撃を受けても物理的な痛みを感じなかったのは、この〝痛覚設定〟を切っていたからだったのか。
試しに全てにチェックを入れ、そして全部マックスまで上げてみる。すると、ピコンという警告音とともにインフォメーションメッセージが浮かび上がった。

《感覚設定、痛覚設定を１００％に設定した場合、それに伴ういかなる損害に対して、責任を負うことができません。自己責任になります》《同意しますか？　ＹＥＳ／ＮＯ》

とりあえず〝ＹＥＳ〟の項目を選択する。
「――ん？　おお？　おお！」

思わず声が出てしまった。道場の板間の固く、少し軋む感触が足の裏に伝わってくる。身体を動かす時の衣服が擦れる音、空を切る音、何より道場で鍛錬を積むＮＰＣの掛け声、息遣い、武器を打ち付ける音、全ての音に臨場感が生まれた。

何となく、ゲームでの自分の身体はやや反応速度が遅れていると感じていたのだが、どうやら大元の原因はこの設定をオフにしていたからっぽいな。

道場に来る前に食べた携帯食料の感覚が少し胃に残っているのを考えると、空腹システムはリアリティ追求の１つの要素で、本命はこの〝感覚設定〟にあったようだ。

「ふむ」

軽くストレッチで身体の感覚を掴みながら、ふと思ったのだが、この状態で死に戻りしてしまったら、いったいどんな感覚がするのだろうか。自己責任も頷けた。

「痛覚を上げたところで自殺行為に変わりはない。今さら後悔しても遅いですよ」

マルスはストレッチしながらはしゃぐ俺を見て、不快そうに鼻を鳴らす。

「後悔するのはどっちだか。さあ、手ほどきの続きをどうぞ、マルスさん」

そう煽り返すと、マルスはムッとした表情で俺を睨んでいた。

「怪我しても知りませんから」

そんな言葉を交わしながら、開始線の上に正対する。そして師範代の「始め」の掛け声とほ

ぼ同時に、――俺はマルスに向かって一歩踏み出した。
「なっ⁉」
意表をつかれ、面食らった表情をするマルス。俺はそのまま襟を掴みにいく。開始前に足元を見ていたが、親指が充血してやや前傾姿勢になっていたから、先ほどと同じように開幕踏み込みフックを用いてくると大方の予想はついていた。
まともに打撃をくらったら、簡単に弾き飛ばされてしまう。近接職と魔法職の間には、かなり高い壁があると先の試合でよく理解できた。だから、拳に力が乗る前に組みつくのだ。
「くっ！　自分から僕の間合いに入り込んでくるなんて！　自殺行為でしかない！」
容易に袖口を取られたくせに、まだそんな強がりをぬかすか。何とか組手を振りほどこうとするマルスだが、それはさせない。相手に攻勢の機会を与えると、途端に俺が不利になりかねないので、全身を使って大きく揺さぶりをかける。
「そういえば、まだマルスに投げは教えてなかったな」
組み際を見ていた師範代からそんな声が漏れていた。
「大丈夫です師範代！　魔法職程度の力なら……無理やりにでも！」
そう言いながら俺の顔面を鷲掴みにし、無理やりにでも組手を引き剥がそうとするマルス。確かに力で勝るなら組手なんぞ無意味かもしれんが、そんな技術もない力技で俺の組手を振り

ほどけるとは思わない方がいい。
彼の軸足を容赦なく踏みつけ、足の急所である甲利を指先でグリグリ。さらに、襟口を掴んでいた左手の親指を鎖骨のくぼみに引っ掛けた。
「ぐあああ！　な、何が！」
柔術における裏技だな。叫び声とともに、顔面をホールドしていたマルスの手が外れた。そのまま右五本貫手の親指で、彼の右目を狙いにいく。
「うっ⁉」
恐怖で顔を背けたか、まだまだだな。顔を背けたことで、マルスの重心が俺から見て左に大きく傾いた。これだけ崩れれば十分。左足を一歩、彼の側面に滑り込ませて右腕を掴むと、開脚して身体をストンと落とす。
「うわぁっ！」
情けない声を上げて、マルスの身体は派手に宙を舞い、投げ飛ばされた。
手足で刈ったり、腰に乗せたりすることなく投げるこの技は、隅落としとともに、空気投げの一種として称される〝浮き落とし〟だ。
身長では俺が勝るものの、力では圧倒的に不利。その状況でやってのけたこの技は、まさに柔よく剛を制すというやつだよな。

本来ならこれにて一本終了なのだが、今回は特にルールを決めていない。背中を強打するマルスにすぐさま馬乗りになり、今度は全身の重さを使って締めにかかる。
「待て！　やめだ！」
そのまま、こいつの高い鼻っ面を掌底打ちで平地にしてやってもよかったのだが、残念なことに師範代から試合終了の合図。マルスの首元から手を離す。
「ゴホッゴホッ！　くっ、卑怯だぞ！　師範代、こんなの無効試合です！」
締め跡の残る首を押さえて咳き込みながら、マルスは充血した目で叫ぶ。
「みっともないぞ、マルス。最初の油断もそうだが、それがなくともおまえの完敗だ」
師範代は腕を組んで仁王立ちの体勢で、冷徹な視線をマルスに向けていた。
「……ありがとう、ございました……くっ」
そんな視線を向けられたマルスは、腑に落ちない表情のまま、ぎこちない言葉とともに一礼し、走って道場から出て行った。彼の去り行く背中を見ながら一礼を返しておくと、師範代が近づいてきた。
「マルスも決して弱くはない。だが、戦いの経験が少なく、相手を見くびる癖がある」
「そんなもんだと思いますけどね、最初は」
「うむ、最近黒帯になって少し増長していた節があったマルスには、いい薬になっただろう。

相手の重心を使って投げる、面白い技も見られたことだし」
そう言いながら、師範代は黒帯を俺に差し出した。
「黒帯を倒した。ならば、君も相応の実力を持っているということ。受け取っておけ」
黒帯か。剣を持ち魔法使いの服とローブを着ている状況で、さらに黒帯を身につけるとなると、いよいよ世界観がちぐはぐになってきたな。
「プっ……きっと似合うはずだ！」
じっと黒帯を見つめる俺を見て、師範代は笑いを堪えていた。

《称号【道場初段】を獲得しました》

さて、よく分からん称号を得たのだが、道場のチュートリアルはまだ終わっていない。先に道場で汗を流す農家のおじさんたちや主婦のおばさんたちに混ざって、稽古を積むことになった。大層な物言いではあるが、単純に師範代の型の動きに合わせて身体を動かすだけだ。
でもそれだけで、いつの間にか【ブースト】のスキルが手に入っていたもんだから、このゲームは侮れない。もしかして健康ランドスキルなんじゃないのか、これ。

◇スキルツリー
【ブースト（最適化）】身体能力を上昇させる強化スキル。
・効果Ｌｖ２／10
・消費Ｌｖ２／５
・熟練Ｌｖ２／５

手に入ったスキルを見ると、全パラメーターがレベル２に上昇していた。そして、要求される上限値も、【スラッシュ】と比べて少ない模様。

「驚いたか？　本来魔法職が適正スキル以外を成長させるには２倍のスキルポイントを必要とするが、道場で身体を動かすことで、スキルを覚える前からスキルに慣れることができ、適正スキルでなくとも適正職と同じようなパラメーターに最適化される！　その後覚えたスキルは全てのパラメーターが１レベル上昇する補正がつくぞ！　さらに、黒帯は道場で得たスキルのパラメーターを一段階上昇させてくれる優れものだ！」

長々としたセリフを言い終えた後、師範代は少し息を切らしていた。テンションで全て持っていこうとするからそうなるんだ。そして、またとんでもない事実が後付けで出てきたな。取

り急ぎ【黒帯】を確認する。

【黒帯】腰装備・軽くて丈夫な素材で作られた帯。色で階級を表す。
・防御Ｌｖ１
・身体能力系スキルボーナスＬｖ１
・耐久１００／１００

身体能力系スキルボーナスと書かれているのが、そうなのだろうか。
試しに腰に装備して、【ブースト】のスキルを確認する。

◇スキルツリー
【ブースト（最適化・黒帯）】身体能力を上昇させる強化スキル。
・効果Ｌｖ３／10
・消費Ｌｖ３／５
・熟練Ｌｖ３／５

素晴らしい。【ブースト】のレベルがオール3になっていた。スキルポイントの配分が重要なゲームだから、この時点で既に3レベル分も得するのはかなりでかいぞ。

「ちなみに、事前に説明されるんですか？」

「道場で鍛錬を受けた者にしか説明していないぞ！　よかったね！　得したね！」

……師範代、胸を張って言えることではないだろう。ある意味、職務怠慢である。

「スキルの鍛錬を怠る者には絶対に教えん！　いいか、魔法使いも武術家もスキルを鍛錬するという点ではみんな同じだ。皆兄弟だ！　絶対に忘れるなよ！」

ついでにいろいろ聞いてみると、道場には段位があり、段位を上げるにつれて道場でしか取得できない専用のスキルがあるそうだ。道場初段の称号が段位の代わりらしい。

これは【黒帯】を取得した者にしか教えておらず、【黒帯】を取得するには、【黒帯】を持つ者を倒すか、師範代の教える型をしっかり覚えて黒帯試験を受けなければならないとのことだった。

◆◇◆◇◆

さて、道場で知った情報は、トモガラに一報を入れておく。今日はログアウトまでまだまだ

時間に余裕があったので、鍛冶屋を探すことにした。先日トモガラと話していた、大剣と刺突剣を購入するためだ。

マップを確認すると、鍛冶屋へ向かうには公園を抜けるのが近道みたいだ。そんなわけで公園へと向かうと、相変わらずプレイヤーたちで賑わっているようだった。

魔法使いの服を身につけたまま長剣を腰に差して歩くと、変なプレイヤーに馬鹿にされたことがあったので、武器をアイテムボックスにしまい、フードを深く被って公園の隅を歩く。

「安いよ～！　ねえ、そこのフードの人。ポーション買わない？」

露店風呂敷にポーションを並べた茶髪の女性プレイヤーから声をかけられた。

「初級ポーションで２００グロウ！　材料持ち込みだともう少し安くするよ！」

小道具屋の店頭価格が３００グロウなので、値段も安くて質も悪くないと思われるが、公園の端っこに露店を構えているので売れ行きは芳しくなさそうだった。

「ってかお願い、買って！　場所取りミスって、今日のノルマ達成できそうにないのよー！」

叩き売りのセリフの途中で、一つ気になったことを聞いてみる。

「材料持ち込みだと、どれくらいになるんですか？」

「持ち込みだと加工費のみだから１００グロウかな！　量にもよるけど、大量に薬草を仕入れてくれればさらに安くするよ！」

ポーションは重要だ。俺は攻撃を受けるごとにポーションで一旦仕切り直さなければならないので、常にアイテムボックスにはＨＰ回復ポーションを余分に入れてあるのだ。
ちなみにＭＰ消費は気にしてない。というか、ＭＰを多めに消費する魔法スキルを持っていないから。気持ちを切り替えていこう。
「ちなみに、薬草を手に入れるオススメの場所ってあります？」
「うーん、そうね……。北の森の採取場の情報が多く上がってるけど、今はやめといた方がいいわね。人がうじゃうじゃいるし。私は南の森をオススメするわよ？　量も取れるし、質がいいって話を聞くし！　これ、薬師の裏情報ね？」
そう言ってウインクする薬師の女性。裏情報を聞けてよかった。こういった情報は、やっぱり本職から聞くと説得力があるな。
北の森には次の町に繋がる道が存在していて、早く攻略して次に進もうというプレイヤーで溢れかえっているらしい。そのおかげで、南の森は過疎化が進行してしまっているようだ。
「おーい、薬草買ってくれないのー？　もしもーし？」
この薬師の女性の話が本当だとするならば、ゴールドラッシュならぬ、薬草ラッシュ。過疎っている今のうちなら、大量の薬草を根こそぎ取り尽くすことが可能なのではないか。これは足を運んでみるのがいいかもしれんな。

だが森は危ないと聞く。グリーンラビットよりも強力なモンスターが出没すると、事前に情報を仕入れていた。ならば、とにかく武器を手に入れるために鍛冶屋が先決だな。

「情報、ありがとうございます」

「ちょ、ちょっと！　買っていかないの？　めっちゃ買ってくれる感じだったじゃん！」

踵を返すと、薬師の女性が足元に縋(すが)ってきた。目立つからやめてほしいのだが。

「申し訳ない。武器を作りたいので、そっちにお金を回したい。このままだと、薬草採取もままならないので……」

正直にそう告げると、薬師の女性は立ち上がって俺の手を握った。

「え！　薬草取ってきてくれるの？　だったら私の知り合いを紹介しようか？」

「こちらこそ、いいんですか？」

職人とコネクションを持てるのは、正直ありがたい。

「今みんなどんどん次のエリアに進んじゃって、この町の周辺で素材を集めてきてくれる人がなかなか見つからないのよね！　私、薬師スキルオンリーで、他の戦闘スキルに1ポイントも振ってないからさ。あ、私はレイラ。貴方は？」

「ローレントです」

「それじゃ、案内するからついてきて。こっちよ」

レイラは茶髪を揺らして微笑むと、露店に出していた売り物をそそくさとアイテムボックスにしまい込み、公園の出口に向かって歩き始めた。
しばらく後ろをついていくと、金床マークの看板が見えてくる。そこが鍛冶屋ね。
「お邪魔するわよ、ガストン」
鉄製の道具や武器が並べられている店内に入り、レイラが名前を呼ぶと、カウンターの奥の扉から筋骨隆々の身体をしたスキンヘッドの男が姿を現した。薄いシャツが汗で身体に張り付いているのを見ると、鍛冶屋の工房は暑くて大変そうだな。
「紹介するわ。鍛冶師プレイヤーのガストンよ。で、こっちの人はローレント」
「よろしくお願いします」
「よろしくである」
ガストンは会釈する俺にジロッと目を向けると、なんとも無骨な挨拶を返した。無愛想だが、こういう職人気質な人種は嫌いではない。
「して、何用であるか」
「大剣と刺突用の剣を1つずつ作っていただきたい」
「ふむ、何かこだわりはあるのであるか？」
「大剣は装備できる限界の重さで。刺突用のはとにかく鋭くしてもらえれば」

俺の大剣の使い方は、【アポート】を利用するので少し特殊だ。振り上げる動作が必要ないので、できるだけ重く、破壊力を追求していきたい。そして刺突剣のイメージだが、とにかく鋭いレイピアを想像している。

「武器には飾り気は必要ないです。純粋に威力のみを重視してもらえればそれで」

打ち合ったところで、マルスの時みたいに弾き飛ばされるのが関の山だし、それこそレイピアはガードすらつけなくてもいいくらいだ。

「ふむ、趣向が合うであるな。武器は見世物ではないであるゆえ」

俺の回答がお気に召したのか、ガストンは打って変わったように饒舌になった。武器を語るその目には、心なしか熱がこもっているような。

「では、ベースになる大剣を選ぶとよい。しっくりくる重さを決めるのである」

ガストンはそう言って、一度店の奥に引っ込むと、いくつかの大剣を抱えて戻ってきた。長さと厚みが異なるさまざまな種類の大剣が、作業テーブルの上に並べられている。

さすがだ。武器屋と違って、豊富な種類が置いてあるな。だが、その全てはオーダーメイドだというので、思ったよりも値が張るものが多かった。

【凡庸な大剣】重く、斬るより叩き潰すための巨大な剣。防御にも使える。

・攻撃20
・防御Ｌｖ１
・耐久Ｌｖ１
・耐久１００／１００

大きく重すぎても、背負って歩けないという珍事が発生しかねないので、結局一番安い無難な大剣を購入した。武器以外にも、狩りへ赴くには食料やポーションなどの消耗品だって必要になるからな。節約が大切なのである。

まったくもって世知辛い。そんなところでリアリティを求めてどうすんだ。ゲームだぞと愚痴りたくなるが、大剣の仕様を見るとそれも吹っ飛んだ。

「武器なのに防御能力？」

「大剣は盾代わりにも使えるのである」

理由を聞いて納得した。いざという時は【アポート】で転移し盾として使えるので、有用性がグッと増したな。攻撃力も長剣の倍近くあるし。

「一度試しておくか。すいません、大剣を地面に置いてもいいですか？」

「いったい何であるか？　まあ、客もいないし別に構わんのであるが」

両手でなんとか持て、背負えることを確認したら、後は【アポート】でも転移できるか一応試しておく。

「アポート！　……うぐっ」

両腕にかなりの重量を感じる。だが、抜き身の大剣の柄は、しっかり手の中に握り締められていた。この【アポート】というスキルは、引き寄せた物体の向きをある程度自分の思うままに変えられるほどの自由度を持つのだが、重い物だとたまに制御を失ってしまう欠点があった。

先日トモガラと狩りの最中、間違えて長剣の刃を握りしめていた時は心臓が止まるかと思った。HPは減っているのに、痛みを感じないから起こった珍事である。

「奇怪なスキルであるな……プライベートもある故に、どこで取得したかはあえて聞かんが、あまり大っぴらに使うのは避けた方がいいのである」

【アポート】を見ていたガストンは、顎に生えた無精髭を撫でながらそう評した。

「そうね。サービスを開始したばっかりで、みんな新しいスキルやクエストを探すので躍起になってるみたいだから、迂闊なことは避けた方がいいわね。掲示板でも話題になるし」

「掲示板？」

首をかしげる俺に、レイラが教えてくれる。

「その様子なら知らない方がいいわね。プレイヤー同士が情報を共有し、コミュニケーション

を取るための匿名掲示板システムなんだけど、だいたい悪口大会だから」
そう言って、レイラは苦虫を噛み潰したような顔をしておどけて見せた。情報共有ツールは気になるが、俺のスキル構成がバレたら真っ先に馬鹿にされるだろうな。
「ああ、なるほどであるか……重いのがいいのは、そういうことであるか」
掲示板の話はひとまず終わり、何やらジッと大剣を見つめて考え事をしていたガストンが、何かに気付いたように呟いた。
「頭上に転移させて、その重さを利用して振り下ろす。そう言うことであるな？」
「その通りです。スキルを利用すれば振り上げる手間が省けますから」
「では、先端部分に重心を置くのである。そうすれば振り下ろしの威力が増すのである」
さすが鍛冶師のガストン。話の要訣（ようけつ）を理解して、俺の戦い方に最も適した調整を提示してくれた。
「刺突剣は、まだレイピアくらいしか作れないのであるが、それでいいであるか？」
「構いません。とにかく鋭さを追求してもらえれば」
「承知した。ではしばらく待つのである。仕上がったら、こちらから連絡を送るのである。フレンド登録をお願いしてもよいであるか？」
「あ、私もいい？　ってかガストンがフレンド申し込むなんて珍しいわね」

こうして俺のフレンドリストに新しい名前が加わった。薬師のレイラと鍛冶師のガストン。ともに生産系スキルを扱っているプレイヤーの2人である。

◆◇◆◇◆

大剣とレイピアの製作にはそれなりに時間がかかるらしく、ガストンから完成の連絡がくるまで、フィールドに出て狩りでもして時間を潰すことにした。向かう先は南の森。レイラに頼まれていた、薬草採取の件も同時並行で行う魂胆である。

【ブースト】を取得し、それなりにスキルレベルが上がったことで、格段に戦闘が楽になった。もうグリーンラビットは敵ではない。途中で遭遇するグリーンラビットを蹴散らしながら進んでいくと、南の森の入り口に辿り着いた。なにやら立て札がある。

《ゴブリン出没注意。南の森の奥にはゴブリンの集落が存在する。人を襲うから注意せよ》

「……ゴブリンとはいったい？」

なんとなくかわいい名前の響きだから、妖精のモンスターとかかな。

まあ、南の森を探索していけば、自ずと出会えるだろう。立て札に〝注意〟と書かれているのを見ると、人を襲うモンスターであることは確定だ。十分に警戒しておくべし。

南の森は、北の森と違って道が存在せず、全てにおいて獣道だ。

草木をかき分けるようにして奥へ奥へと進んで行くと、幸運なことに薬草の群生している場所を発見した。

レイラという固定の薬草卸し先が定まっている今、薬草の群生地は大きな金山にも思えてくる。薬草はいくらでも欲しい。

「ギギ……？」

「ん？」

茂みを跨いで群生地へと入って行くと、先客がいた。プレイヤーか？

それにしては肌が緑で子供のような体型をして、汚い服を身につけている。薬草採取の小遣い稼ぎでもしている孤児か何かか？　紛争地域を渡り歩くと、よくいるし。

「たくさんあるし、俺も少し貰っていくぞ？」

俺を警戒して睨んでいる子供にそう告げて、薬草採取用に持ってきた麻袋を広げる。

「ギ、ギギギー‼」

少し離れた場所で薬草を採取するために身を屈めると、緑色の子供が牙を剥き出しにして、

いきなり襲いかかってきた。
「うわっ」
「ギヘヒッ!?」
掴みかかり、首筋を狙って本当に噛みつこうとしてきたので、巴投げの要領で後転して態勢を入れ替え、そのまま体重をかけて肘で首をへし折ってしまった。

【ゴブリン】Ｌｖ６
森に住む小鬼の魔物。繁殖力が強く、道具を用いる知能を持つ。

解体する前に緑色のモンスターを鑑定すると、こいつがゴブリンだった。
一時は子供に手をかけてしまったかと焦ったが、よくよく見れば緑色の小さなおっさんみたいな顔をしている。
まあ、ゴブリンを子供のＮＰＣだと勘違いする俺もどうかしてた。
解体して得たドロップアイテムをさっさと鑑定する。

【小鬼の骨】ゴブリンの脆い背骨。粉々にすると肥料になる。

【魔石（小）】さまざまな素材に利用できる。価値に比例して大きさと色艶が変わる。

骨と魔石を手にいれたわけだが、どうやって使用すればいいのかは謎だ。骨は脆くて鈍器にすらならん。ひとまずアイテムボックスの肥やしにして、必要なＮＰＣまたはプレイヤーがいたら売り払ってしまおう。

それよりも、先ほどのゴブリンは薬草を摘んでいた。薬草というだけあって、ポーションの材料にしなくとも、傷口に擦り付けたりすれば傷の治療に役立つのだろう。

ゴブリンの鑑定結果を見ても、〝道具を用いる知能を持つ〟と書かれているので、怪我をしたゴブリン用に薬草を集めに来ていたと推測できる。

ということは、ここで待っていれば他のゴブリンが勝手に姿を現すのではなかろうか？　待ってみる価値は大いにある。迂闊に森の中を歩くよりも、茂みに隠れてやってきたゴブリンに奇襲をかける方が遥かに安全だ。

さっそく茂みに身を潜め、ゴブリンが薬草採取に来るのを待つ。そういえば、先ほど襲いかかってきたゴブリンは、明らかにグリーンラビットよりも強そうな個体だった。

草原に出現するグリーンラビットのレベル帯はだいたい1から3で、今回倒したゴブリンのレベルは6だったから、それを考えるとよく一撃で倒せたよな。

3章　相方の名はローヴォ

ログインすると、ゲーム時間では朝方だった。空腹度がかなり高かったので、何か食べるものがないか探すが、携帯食料しか見当たらなかった。そこで思い出したのが、サイゼ特製のサンドイッチだ。調理師とフレンドになったではないか。

取り急ぎ携帯食料で腹を満たすのもいいが、フレンドリストを確認するとサイゼがログインしているので、公園に向かうことにした。

プレイヤーで混雑する公園の一角で、サイゼの営む屋台とやらを見つけた。ご丁寧にテーブルやベンチも準備してあって、ゆったりとした空間がそこには存在していた。

「あ、ローレントさん、おはようございます！　夜の狩りはいかがでした？」

「なかなかよかったですよ」

プレイヤーキラー3人分の賞金のおかげで、懐はかなり暖かい。それに、飛散していた彼らの装備類やフォレストウルフの革素材も大量にあるので、目算だけでもかなりのもんだ。

「とりあえず空腹なので何かありますか？」

「はい！　エッグサンドが人気ですよ！　その他の具材などは立て札に書いていますので、お

好きなカスタマイズでオリジナルサンドイッチをどうぞ～！」
サンドイッチ専門店か。画期的で素晴らしいとは思うが、朝からガッツリ派の俺からすれば少し物足りなく感じるなあ。
「サンドイッチだけなんですか？」
「朝は狩りに出かけるプレイヤーさんや仕事に出かけるＮＰＣの皆さん向けに、包める食べ物を取り扱ってるんですよ～！」
そういうことなら仕方がない。このラビットソテーソースサンドとやらにしてみよう。
「このサンドイッチを、ソースと野菜をマシマシで……」
カスタマイズを考えていると、サイゼの視線が足元に向く。
「あら？　ローレントさん、その子はいったいどうしたんですか？」
「その子？」
足元を確認する。
「わふわふわふわふ！」
灰色の小さな犬が俺のズボンをはむはむしていた。
何だこいつ！　涎が付くからやめろよ！
「……か、かわいい～！」

サイゼは、屋台そっちのけで子犬の元へ駆け寄っていく。あれ、俺のサンドイッチは？

「この子、ハスキーでしょうか？　それともアラスカンマラミュート？」

「……さぁ？」

犬なんて柴犬か、土佐犬か、それ以外くらいの認識しか持ち得ていない。それに、サイゼにもふもふされている子犬は、どちらかといえば狼の子供に似ているような気がしないでもない。

……狼だと？　一つ心当たりがあった。

「サ、サンドイッチとか食べる？」

「ワォンワォンワォン‼」

試しに、サイゼの店にあるサンドイッチを指差して声をかけてみると、めちゃくちゃ尻尾を振り回して俺の周りをぐるぐると駆け回り、喜びを表現していた。

「事実確認のために鑑定をしてみます」

【グレイウルフ】Ｌｖ１
種族：灰色狼（幼体）

あかん、やっぱり狼だ。
「すごく微妙そうな顔ですけど、鑑定結果はどうでした？」
「この子は狼です。狼の子供でした」
「わぁ、そうなんですね！　どっちにしろ犬科だからかわいい～！　サンドイッチ食べる？」
それでいいのか、サイゼ。一応調理師だろうに。彼女はひとしきり構い尽くして満足すると、抱きかかえながら俺に尋ねた。
「で、この子、どうしたんですか？」
あくまで推測の範囲なのだが、思い当たる節を考えてみる。このサンドイッチ大好きモンスター、昨日のフォレストウルフなんじゃなかろうか。
「昨夜の狩りで、プレイヤーキラーを3人倒したんですが、その時、彼らの攻撃を受けて傷ついたフォレストウルフに、ポーションとサンドイッチを分けて助けてあげたんです」
まさに鶴の恩返しならぬ、狼の恩返しとな。それを話すとサイゼは絶句していた。
「これはちょっとレイラさん案件です。事案です。一旦屋台を閉めて、ガストンさんのいる鍛冶屋にみんな集合しなければ！」
「え？　は？　そんな大げさな、ちょっと落ち着いて」
「今ならみんなログインしてますし、こういうのは早めに話し合うのがいいですよ！」

サイゼにそう言われるがまま、ささっと店閉めを手伝い、そのままガストンのいる鍛冶屋に全員集合となった。

◆◇◆◇◆

鍛冶屋には、ガストン、レイラ、サイゼ、セレクが集まっている。

「ヘジー、ラスター、ザークって、サービス開始直後から暴れ回ってた奴らじゃないのよ……あんたよく狩れたわね」

事のあらましを話すと、レイラが呆れた顔をしていた。

「ふむ、モンスターを助けたら、そのモンスターらしき子犬が懐いてきたのであるか？」

本当は狼なのだが、もう子犬ってことにしておく。犬科だし。ちなみにこの子犬はどうやらガストンの顔が怖いようだ。ガストンが一撫でしようと近づくと、悲鳴を上げて俺かサイゼの元へ逃げ出していた。

「地味にへこむのである……」

「そうだ、先にプレイヤーキラーの戦利品。私らが買い取るわよ？」

気落ちするガストンを尻目に、レイラがそんな提案をした。

当然乗っておく。いちいち売り捌く手間が省けて助かる。
「よろしくお願いします」
どうせ俺が得た戦利品も、あいつらが他の誰かから奪った物だろう。こういうプレイヤーキラーの財産なんか、さっさと市場の海に流れてしまった方が世のため人のためだ。
あぶく銭と一緒で、持っていても面倒ごとを招き寄せるだけ。さっさと手放し、他に価値のある物に変えてしまった方がリスクも手間も少ない。改めて目ぼしい戦利品をテーブルの上に並べて鑑定していく。

【丈夫な両手斧】使いやすく丈夫な両手斧。斬り下ろしで威力上昇。
・攻撃17
・斬撃Ｌｖ１
・耐久Ｌｖ１
・耐久１００／１００

これは元々ヘジーが持っていた武器だ。現役で使っている俺の武器と比較すると、すごく強いのが分かる。以下、ガストンの評価。

「この時期、鉄製の斧で攻撃力17を作れるのはなかなかの腕前である」
製作者が気になるようだったが、盗品の盗品みたいなもん分かるはずもない。
よし次、ザークの使っていた武器。

【黒鉄の長剣】鉄より重く、遥かに丈夫な黒鉄で作られている。
・攻撃20
・耐久Ｌｖ３
・耐久１００／１００

「何で長剣のくせに大剣と同じ攻撃力持ってんだ」
鑑定結果に、思わず素が出て、敬語も忘れて突っ込んでしまった。強すぎないか、この長剣。
あの時、一太刀でも攻撃を受けていたら、死に戻りして泣いていたのは俺だったな。
「黒鉄は鉄の上位に位置する素材である。一応我が輩も扱えないことはないのであるが……黒鉄鉱石を持っているプレイヤーの情報なんてまだどこにもないのである」
ガストン曰く、出所はおそらく第二の町だろうとのこと。第二の町には自由市と呼ばれる催しが不定期に開かれていて、たまにレアな掘り出し物が見つかることもあるらしい。

……そりゃ人が集まるはずだわな。運次第でレアなアイテムが手に入るなんて、それってどんなガチャガチャだよと言いたい。

「例え持っていたとしても、本当に最前線の攻略組くらいしか買うことができない品物である。そんな攻略組から奪うほどのプレイヤーキラーを前にして、よく足が竦まなかったであるな」

「まあ、運ですかね」

伝家の宝刀である横三角絞めが通用した以外は、基本的に本当に運だったりする。フォレストウルフの群れが彼らを襲わなかったら、もっと苦戦していただろう。

「運だけで倒せたら、我が輩は今頃石油王である」

意味が分からん。

さて、ラスターの弓はフォレストウルフに壊されていたので、一番良さげなアイテムといえば、この両手斧と長剣の2つのみ。両手斧は振り回すには重く、かといって大剣のように重さを武器にすることができない中途半端な武器だったので、ガストンを通して売り払うことにした。

そして黒鉄製の長剣は、ガストンのアイデアでレイピアとして打ち直すことになった。

「鉄に比べて遥かに丈夫。少し重いが、鋭さをさらに向上させることができるのである」

素材を前にして、アイデアをどんどん出すガストン。頼もしすぎる。

「俺としてはガードも全て廃止して、把手(とって)に柄巻きだけをぐるぐると巻き付けてくれるだけでよかったりするんですが、そうなれば本当に突き刺すだけの鉄の棒になるんですけど」
「その案、良いかもしれん。余計なパーツを廃止して軽量化する分、強度も向上するのである。あと、投げる時にバランスが取りやすい」
ガストンから思わぬ賛同を受けてしまった。なら、細かい部分は彼に任せよう。
「あとはこの装備類の処分ね……う～ん、ただの革鎧であちこちに噛み跡がついてるから価値は低そうよ。新参プレイヤーに安く売るくらいかしら」
戦闘による消耗でやや質が悪くなった素材たちをレイラがそう評価していると、後ろで黙って見ていたセレクが口を挟んだ。
「いや、これだけあれば、適当に1つでっち上げられるわね」
「本当なの？　まーた適当なこと言ってるんじゃないわよね？」
「ちょっとレイラ！　ローレントの前で変なこと言わないでよ！」
ゴホンと咳払いをして、セレクはテーブルの上に置かれた革鎧の残骸やらフォレストウルフの皮素材やらを手際よく分けていく。
「うん、粗方分かった。これならいけそうよ。そこそこ良い素材も一部使われてるから、上手い具合に流用すれば革装備一式くらいなら製作可能ね」

「おお、本当ですか？」
「ローレントって、今はまだ初心者用の装備でしょ？　なら、私に製作任せてみない？　今より確実に良い性能の装備を安く作れるわよ」
「なら、ぜひお願いしたい」
資金は多めにあるが、今後のことを考えると、こうして安価で作ってもらえるのはありがたい話だった。セレクは懐から採寸用の巻尺を取り出して、俺の身体を測っていく。
「この鉄の胸当てはどうするであるか？　打ち直してリサイズしてもいいのであるが、その分装備は重くなる」
少し考えて、ザークの着けていた鉄の胸当てはそのままガストンに渡すことにした。胸当ての防御性能は欲しいが、現状あまり重い物は装備できない。魔法職だから。
「まあ、私に任せておきなさいって。革鎧でも十分な防御性能は保証するから」
「私もセレクの腕は保証するわよ」
レイラがお墨付きをしているので、そのままセレクに素材を全て渡した。ついでに余った素材の買取も行って、装備代金との相殺もしてくれるとのことで、至れり尽くせりだった。
「ありがとうございます」
「納期は明日。とりあえずできたらメッセージ送るから、フレンドリストにローレントを追加

してもいいかしら？」
その言葉と同時に送られてくる、フレンド依頼。うむ、快く承諾しておきましょう。
「セレクまでフレンド送るって、また珍しいわねー。ガストンの時も思ったけど」
会話を聞いていたレイラがそう言った。
聞くところによると、鍛冶師、縫製師、調理師、薬師の生産スキルを持つプレイヤーは、フィールドを冒険するにあたって武器や装備、そして食事に回復と重要な部分を担っていて、取引したプレイヤーからそのままフレンド依頼を受けることが多いらしい。
「面倒なプレイヤーもたくさんいるから、基本的にフレンドは受けないのよ」
特に女性プレイヤーだと、ナンパ目的でフレンド依頼を送ったり、下手に関わると変なストーカー行為に発展することがあるんだとか。世知辛いな。
「なるほど。良縁に恵まれてよかったです」
初めてのゲームでいろいろ失敗することも多かったが、こうして良縁に恵まれてフレンドリストの人数が増えていくのは地味に嬉しかった。
「まあ、なんだかんだで貴重な素材とか大量の素材を融通してくれるって実績があるから、私たち生産職の期待値もかなり高いし、信用してるってことよ？」
「ふふ、そうよ。そのための先行投資なんだから、気にしないで私にもレア素材持ってきて」

「なら、私にも貴重な食材を手に入れてきてくださいです！　レア食材！」
そう言って笑い合う女性陣の様子に、俺もガストンも自然と顔が綻んだ。
「それじゃ、問題は引き続きこの子ね」
「ドッグタグならばすぐに作れるのである」
「それより、首輪の方がかわいいです」
「首輪ならすぐに作れるわね」
レイラ、ガストン、サイゼ、セレクがそれぞれ呟く。
「そんなことより、モンスターって懐くんですか？」
「やっぱりそこよね？」
俺の質問にレイラは頭を悩ませていた。
傷ついたフォレストウルフにポーションとサンドイッチを恵んだだけなのだが、それだけでモンスターが懐くなら、世の中は懐いたモンスターだらけになるだろう。
「何かしらのトリガーがあってこうなったのよね？　本当にこのゲームって、スキルの情報とかクエストの情報とか公式に何にもヒントが書いてないから困ったものよ！」
レイラは髪を掻きむしりながら一通り荒れ狂ったあと、もういいやと諦めた顔で言った。
「まあ、ローレントがラッキーだったってことで、軽く受け取っておきましょ」

4章　とある魔法使いへの弟子入り

スターブグリズリーからドロップしたアイテムは以下の通りである。

【茶毛羆の皮】重く丈夫な毛皮。防刃効果が見込める。
【茶毛羆の爪】太く大きな鉤状。鋭くて丈夫。
【茶毛羆の胆】胆力アップの万能薬となる。
【茶毛羆の骨】太くて丈夫な背骨、さまざまな武器の素材として使える。
【茶毛羆の手】珍味。煮込むと美味とされる。滋養強壮によい。

まさに、熊尽くしといったところだ。毛皮と爪は複数個手に入れている。気になるのは熊の手と胆なのだが、サイゼに調理してもらえるだろうか。

ちなみに大きな傷を負っていた俺とローヴォは、一度ログアウトして再びログインする頃にはすっかり傷も癒えて完全復活していた。

プレイヤーネーム：ローレント
職業：魔法使い見習いＬｖ12
信用度：50
残存スキルポイント：2
生産スキルポイント：6

職業レベルはいつの間にか12になっていて、得たスキルポイントは全て【アポート】の精度に振ることに決めた。現状では、距離はそこまで戦闘に影響しないからな。生産スキルポイントは、漁師の方針がもう少し定まってから一気に振ることにしている。

【アポート】物体を手元に引き寄せる魔法スキル。
・精度Ｌｖ９／10
・距離Ｌｖ２／10
・重量Ｌｖ10／10
・詠唱Ｌｖ１／１

さて、昨日やり残したことを全て終えると、俺とローヴォはガストンのいる鍛冶屋に向かった。スターブグリズリーにへし折られた大剣を直すためだ。
「……どうしてこうなったであるか？」
真ん中から2つに折れた大剣をガストンに見せると、首を捻っていた。
「スターブグリズリーの一撃でぽっきりと」
「にわかには信じ難い事実である」
彼は折れた大剣と黒鉄のレイピアを作業台の上に乗せてチェックする。このレイピアの方もここ最近ずっと使用してきたから、随分と耐久値が減っているのだ。
「うーむ、レイピアの方は投げて使っているのが原因で、ここまで耐久値がすり減っているのである。貫通力を上げるためにいろいろ取っ払っているものの、投擲用ではないであるからな」
そう言うガストンだが、アポートを織り交ぜた戦闘は基本的に投擲から全てが始まる。投擲用ではないといえども、切っても切り離せない関係なのだ。致し方あるまい。
「大剣は元に戻りますかね？」
「重心の位置を先端に変更したツケが出ているのである。このレベルだと、新しい物を打ち直した方が無難なのである」
ポッキリ折れた大剣は、このまま処分される運命となった。スターググリズリーとの戦いは、

この大剣がなければ俺の身体が真っ二つになっていただろう。お疲れ様、合唱。
「新しい大剣の素材ですが、スターブグリズリーの骨は使えます？」
「十分活用できるのである。承った。そしてレイピアの方はすぐ耐久を戻せるのであるが、大剣には１日時間をいただくのである。よろしいか？」
「構いません」
今日は狩りには行かず、スティーブンの弟子入りクエストを完了する予定だから、大物の武器は必要ないだろう。レイピアで十分だ。
「では、スターブグリズリーの骨素材は貰い受けた。持ち込み故に加工費のみなのだが、余った骨の素材は我が輩が貰って、その分を加工費に当ててもよいであるか？」
持っていてもアイテムボックスの肥やしになるだけなので、二つ返事で答えておく。
「恩にきるのである。少し待つである」
そう言って工房の奥へ引っ込んだガストンは、しばらくすると耐久値を元に戻したレイピアを携えて戻ってきた。
「一応製作の間、大剣のリースもしているであるが？」
「いえ大丈夫です。それより少しだけ工房のスペースをお借りしてもよいですか？」
「それなら５００グロウで使用許可が出るのである」

許可を貰い、ガストンの後について工房内へと入っていく。
中は相変わらず蒸し暑い。焼けつくような熱さではなく、鍛冶師たちの汗が蒸発して、この蒸し暑さを醸し出しているのだ。感覚設定を一時的にオフにすればいいのだが、それをすると生産スキルの効果が落ちる。故に耐えるしかない。
さて何を作るのかというと、漁師の必須道具といえる魚鉤である。ドロップしたスターブグリズリーの爪を見た瞬間思いついたのだが、鉤状になった形がピッタリなのだ。
鍛冶場のＮＰＣやガストンが鉄を打ち付ける音を聞きながら、俺もアイテムボックスから木材を取り出して、鋸を使い手頃なサイズの棒へと切り出す。
最近の魚鉤はヘッドと鉤の部分が一体型になっていて、そこに取っ手をはめ込んでネジで止めるタイプが多いのだが、ネジを持っていないし、作り出す技術もない。ガストンとミツバシあたりに注文すれば作ってくれそうだが、ここは生産スキルポイントを獲得するためにネジを使わず自作しよう。
まず鉤を取り付ける部分を削り、溝を作る。スターブグリズリーの長く鋭い鉤爪の背中を溝に合わせて取り付けると、濡らした麻紐でしっかり隙間なくグルグルと縛って固定する。あとは鉤の部分を鋭く研げば完成だ。

【魚鉤】爪製の手鉤。自然素材で鋭く丈夫。漁具に分類される。
・攻撃10
・耐久１００／１００

至極簡単な作りだが、今の俺にはこれが限界だな。
「それは何であるか？」
ガストンが興味深そうに尋ねてくる。
「魚鉤ですよ。魚のエラに引っ掛けたり、締めたりする」
「なるほど。鉤の部分を鉄製にすれば、何かと便利な形であるな」
そんなことを話しながら長い魚鉤と短い魚鉤をそれぞれ作り終わり、ガストンの方へ目を向けてみる。なにやら熱した鉄とスターブグリズリーの骨が２つ並べてあった。
「これは？」
「ボーンブレイドであるな。鉄と組み合わせることで、威力と軽さを両立できるのである」
「……なるほど。分からん」
「世間一般からすれば、魔法スキルを持たない魔法職が、ソロでスターブグリズリーを倒す方

が夢幻に近いのであるが……」

実際に倒したんだから、夢でも幻でも何でもないのである。

とりあえず目当ての魚鉤は作れたので、ガストンと鍛冶屋の親方にお礼を言って、その場を離れた。さっそく作った魚鉤の使い心地を試してみたいところではあるが、そろそろスティーブンの元へ向かわなければあとが怖そうだ。町の通りを抜けて、彼の家へと向かう。

真鍮のドアノックを鳴らすと、中から嗄(しゃが)れた低い声が聞こえてきた。

「……開いておる」

中へ入ると、暖炉の前に置かれた1人用のソファに座って、相変わらずパイプを燻らせるスティーブンが目に入った。

【スティーブン】NPC：???

職業：魔法使い

なんとなく鑑定してみたら、レベルが見えなかった。いったいどういうことだ？

「鑑定を使うのはよいことじゃが、無闇やたらに使って礼を欠かんことじゃな」

どうやら鑑定を使ったのがバレているようだった。ジロッとした眼差しが俺を射抜いて、ス

ティーブンはパイプから灰を落とし立ち上がる。
「倒した証とスキルツリーを提示せよ」
「はい。あと、これはスターブグリズリーの手です」
言われるがままにスキルを開示し、ついでに証明として熊の手を渡す。【アポート】はまだ限界まで育っていないが、それでも彼の言いつけ通り、魔法スキルを一切取らずにエリアボスを倒してみせた。
「ですが、1人ではなく2人で倒した形になります」
鑑定を感づかれるくらいなので、スティーブンを出し抜くことはやめておく。だから正直にローヴォとともに戦い、そしてローヴォに助けられたおかげで何とか倒したことを告げた。
「よい、些細なことじゃ。この狼の子供もお主のことを好いとるみたいじゃしな」
スティーブンはローヴォを抱きかかえると、頭から背中にかけて大きく撫でてやっていた。ローヴォも気持ちよさそうに身体を伸ばしている。
「それでは弟子入りを認めていただけるんですね」
「うむ。それより先にやることがある。行くぞ」
スティーブンはそう言って杖を振った。魔法陣が出現し、視界が暗転する。煙くて薄暗い彼の部屋から一転して、不思議な植物の明かりに包まれた木造の建物の中へと転移していた。

この内装には見覚えがあるな。
「魔法使いギルドですか？」
「うむ、見たところ適正レベルに満ちておるのに、お主はまだ見習いみたいじゃったからな」
そう言いながら、スティーブンは魔法使いギルドの中をズカズカと進んでいく。
「あらスティーブンさん、魔法使いギルドへ来るなんて珍しいですね？」
「こいつの転職じゃ」
スティーブンがそう告げると、やや扇情的な格好をした受付のお姉さんが、俺の格好を見て眉を潜めていた。そういえば、剣を持って魔法使いギルドに入るのはまずいか。慌ててアイテムボックスにレイピアをしまおうとすると、スティーブンに止められた。
「よい。胸を張れ」
受付のお姉さんは訝しげな表情で聞く。
「まさかとは思いますが、もしかしてお弟子さんですか？」
俺を見たときの対応がガラリと変わっているなあ。なんだかスティーブンの顔に泥を塗ったみたいで、すごく申し訳ないのだが。
「まあ、そんなもんじゃの」
あっけらかんと言ってのけたスティーブンに、受付のお姉さんが慌てだした。

「じ、事件です……ギルド長に報告しておかないと」
「よい、そこまでせずとも儂から話しておく。ほら、さっさと自分の仕事をせぬか」
「は、はい！　分かりました！」
スティーブンがそう言うと、冷や汗をだらだらと流し始めた受付のお姉さん。そんな彼女の案内に従って、奥の部屋へと案内される。ちなみに転職とスティーブンは口にしていたが、漁師から農家にでも鞍替えしろってことか？
「ええと、初めてよね？　まずはこの石版に手を当ててみて？」
まるで腫れ物を触るような扱いで、お姉さんにそう指示される。言われた通り手を当てると、石版から浮かび上がるウィンドウには、俺の名前やレベル、職業、スキルポイント、信用度、スキルツリーが映し出されていた。
「……本当に魔法使いになりたいのよね？　スティーブンさんの弟子だし」
俺のスキル構成を見た受付のお姉さんは、困ったように眉を顰（ひそ）めてそう言った。
「え？　そうですが」
「なら、石版に表示されてる職業から、先に進みたい職業を選ぶといいわよ。ちなみに光っているのが選べるもので、光ってないのが選べないもの」
腫れ物を触る扱いから、投げやりな対応に変わってしまった。説明するのが仕事だろ。しっ

かりやれ、ババア。心の中で吐きながら、石版に表示されている転職先を見る。

◇現在職業：魔法使い見習い
☆次の職業を選択してください。
【無属性魔法使い】※選択できません。
【火属性魔法使い】※選択できません。
【水属性魔法使い】※選択できません。
【土属性魔法使い】※選択できません。
【風属性魔法使い】※選択できません。
【光属性魔法使い】※選択できません。
【闇属性魔法使い】※選択できません。

まさかの全て選択できないパターンだった。どうやら当てハマる属性の攻撃魔法スキルを取得していないと、一次転職ができないらしい。【アポート】は一応無属性魔法スキルだろうに、でも攻撃魔法じゃないから対象外なのだろうか。先に説明しておけよ、あのクソジジイ。

「まあ、エナジーボールならすぐ覚えられるから、無属性魔法使いなら今すぐ転職できるわよ」

「……それでお願いします」

なんとも言えない空気が漂う中、お姉さんの指示に従って初期魔法スキルの【エナジーボール】を取得した。

【エナジーボール】魔力の玉を飛ばしてダメージを与える攻撃魔法スキル。
・威力Ｌｖ１／５
・消費Ｌｖ１／５
・熟練Ｌｖ１／５
・詠唱Ｌｖ１／５

初めての攻撃魔法スキル。なんかちょっと感動。ってか、この第一歩を踏み出すのにどれだけ時間がかかってるんだろうか。１周回って笑えてくるだろ、こんなん。

さて、改めて石版に手をかざすと、無属性魔法使いに転職可能となっていた。

《無属性魔法使いに転職することができます》《転職しますか？　ＹＥＳ／ＮＯ》

〝ＹＥＳ〟を選択すると、晴れて無属性魔法使いに転職したことを告げるインフォメーションメッセージが届いた。
「おめでとうございます。プロフェッショナル目指して頑張ってください」
定型文らしきセリフを口にするお姉さんに、一応諸々の説明を聞いておく。
職業は、一定のレベルを達成するごとに転職というものがあり、中級、上級と上位職業になるにつれて、どんどん細分化して強いスキルを覚えていくらしい。
無属性魔法使いは、無属性魔法スキルの派生選択が増えて、無属性魔法スキル使用時の威力上昇や消費ＭＰの節約などが見込めるそうだ。そして、一次転職ボーナスでスキルポイントを５ポイントも貰った。至れり尽せりということで、【アポート】の精度を上限値まで上げて、あとは距離のパラメーターに振っておく。
「ふむ、エナジーボールも無事に覚えて転職できたようじゃの」
スティーブンの元へ戻ると、そんなことを言われた。やっぱり全て分かってやってた節があるな。自分で【エナジーボール】を教えるのが、そんなに面倒だったのか。
「では行くかの」
嫌味の一つでも言ってやろうと思ったが、その前に魔法陣が出現し、再び視界が暗転する。
「――む？」

試し読みはここまで

続きは書籍版でお楽しみください

書籍情報はこちら

http://books.tugikuru.jp/detail_gso.html